

【論文】(査読あり)

大学生の「俗信」的知識と実践

山田 巖子・原 克昭・羽瀧 一代

1 はじめに

日本民俗学では「合理的、科学的な根拠がないのに経験的に信じられてきた知識」を「俗信」と呼んできた(注1)。非体系的で個人的な知識に属する「俗信」は、「俗信」の概念規定の研究〔小島 1983〕、あるいは俗信内での論理の整合性、隠された構造を探る研究〔板橋 1998等〕の他は、理論的な進展はなく、特定の宗教者の活動や、行事や儀礼に関する調査の際に収集されたデータが蓄積される傾向にあった。しかしながら、このような方法では、同時代に生きる「俗信」の社会的配置を解明することは難しい。宗教的な背景のある「俗信」も今では現場を離れ、単なる「知識」や場合によっては「都市伝説」的な受け取られ方をしている場合がある。民俗学において「俗信」カテゴリーに内包した「呪術」の研究は、海外の研究と連動しながら、宗教学や人類学の分野で、あるいは歴史学の中の信仰史の分野で議論されてきた。それらは科学や宗教との関係で、その異同や類似が議論されてきたといえる〔小野編 1978〕。近年では、同時代の日常の中にある呪術を「(A)と分かっている、でもやはり (B)」という言葉を手がかりに、「言葉」と「行為」をつなぐ飛躍のあり方、すなわち、必ずしも信じているとは言えないにも関わらず、行為としてあり続ける呪術のあり方が議論されている〔関 2004、2012〕。

一方、現代にも持続する俗信は、社会環境にも一定の影響をもたらしている。例えば、「丙午(ひのえうま)生まれの女性が夫を不幸にする」という俗信によって、直近の丙午の年に当たる昭和41年(1966年)には前後の年に比べて俄かに出生数が下がった〔赤林 2007〕。

このような状況にあって、竹内郁郎・宇都宮京子による社会学分野の量的な調査研究は画期的であった〔竹内・宇都宮編 2010〕。「お守りを捨てられるか」「観戦していないとひいきのチームが負ける気がするか」といった質問項目は、「呪術」が遠いものではなく、現代に生きていることを認識させる効果があった。また、「呪術」を信じる人々の生活背景に関わる質問項目も従来の研究にない視点であった。

しかしながら、竹内らの研究は「呪術」の定義に課題が残る。同書では「何らかの目的のために超自然的な現象をおこさせようとする行為およびそれに関連する信仰・観念の体系」とする『文化人類学事典』〔石川他編 1987〕の「呪術」の定義を参考に、「人々が祈りや儀礼的な行為を通して、超自然的な存在に自分たちの願いを伝えたり、かなえてもらえる可能性を多少なりとも信じている

場合」を「呪術的」と捉えている〔宇都宮 2010〕。この定義では、調査データとは別に「信じている」かどうかは、分析者の判断に委ねられる。つまり行為と意識とを厳密に分けているとはいえない。また、「呪術」と「慣習的行為」の切り分けも不十分であった。さらに、調査範囲を東京都二十三区に限るのであれば、東京都以外のデータとの比較を通して明らかにされるべきである。東京都二十三区に限られた調査研究では、「俗信」の地域的な広がりや、「知識」の配置の偏差などの問いに答えることはできない。

日本民俗学においても、地域別の資料の蓄積はあるものの、その知識が地理的にどの程度分布しているのか、誰がその知識をどの程度保持しているのか、明らかにされてはこなかった。また、ともすれば「古老」からの調査収集が主流となり、若者の「知識」は「俗信」研究の枠組みでは等閑視されてきた。

本論文の目的は、若い世代とくに大学生における「俗信」的知識の浸透とその実践を、その背景となる生育環境や地域差とともに量的に把握することである。ここでは「俗信」を「科学的に証明されていないが受け入れられている経験的な知識」と定義した。「信じている／信じていない」は俗信において重要ではなく、「不合理な行為」をそれと知って、あるいは知らずに、保持していることこそを問題にしたいと考えたからである。したがって、本調査の主眼は大学生の「行為／不行為（禁忌）」または「知識」に焦点をあてた調査研究とする点にある。

さらに、日本思想史あるいは宗教文化史的な視座から本調査研究の意義を考えたとき、もう一つの学術的な可能性が想定される。現代人の宗教に対する意識調査は、いわゆる日本人“無宗教”論の隆盛とも相俟って、これまで様々な形で実施検証されてきており、いまや若者の宗教離れは既成の前提として認知されている趣すらある。しかしながら、非宗教的と思われる日常の行為のうちにも、「俗信」に類する所作や「俗信」に由来する行事が多く存在している点は看過できない。自然現象や経験則にもとづくタイプとは別に、「俗信」的知識や行為には文化史的な由緒や由来、思想的な縁起説話や起源伝承を有するものも少なくない。そのような知識は、現代においてどれほど認識されているのだろうか。かりに認識されている場合、どのような知識がどのように伝えられているのか。現代となってはほとんど根拠を伴わない、あるいは必要としない「俗信」的行為について、改めて「知識」の有無という観点から捉え返すことによって、大学生の「俗信」に対する意識性（意識的／無意識的）や自覚性（自覚的／無自覚的）を考察するための新たな一視角を提示してくれる点に、もう一つの本調査の有する意義と可能性が見出される。

なお、「俗信」に関する由緒の中には諸説紛々なものから眉唾な俗説や語呂合わせ的なこじつけも含まれるが、本調査において問われていることは知識の正確性や正誤検証ではなく、あくまで現代の大学生が「俗信」に由緒や起源を意識しているか、それを知識として自覚して行動しているか、という点にある。たとえば、平安宮中の追儺を起源として室町時代に庶民化した節分の豆まきや、邪気祓いのお札の信仰と中国由来の七夕信仰（五色の短冊）が習合化した七夕などは、もはや年中行事の一環として学校の行事や家族のイベントごととして馴染み深いものであろう。では、そ

れが正確な知識がどうかはさて置き、その由緒を知っているか、つまり文化史的行事と認識して節分に「鬼は外、福は内」と豆を投げ、その起源を意識して七夕の笹に願い事を書いた短冊をつるしているか、行為と知識の相関性といった観点で検証すると、どのような結果が得られるであろうか。

また、「丙午」といえば、十干十二支という思想基盤をもとに、江戸期の井原西鶴『好色五人女』や明治期の夏目漱石『虞美人草』の中で夫を不幸にする女性として文芸化された「俗信」であり、先述の通り近代（明治39年丙午・1906年）・現代（昭和41年丙午・1966年）の出生率にまで影響を及ぼした社会的な「俗信」である。そのような文芸発祥から社会現象化した「俗信」と、節分や七夕のような年中行事化した「俗信」を、それぞれ「俗信」的知識を梃子に対比した場合、どのような温度差が読み取れるだろうか。同様の視点は、神社への祈願や初詣、お墓参りといった行為に関する意識との相関性にも通底する点で興味深く、また如上の主に集団的行為を基調とする「俗信」に対して、きわめて個人的な次元における「俗信」との対比も注目すべきポイントのひとつである。

調査設計の段階では、日本民俗学において議論されてきた「俗信」の枠組みを念頭に置いて変数を設定している。「俗信」は「生活目的」と「知識」「手段と方法」に分けられる。「知識」は「未来を推測する基礎知識である兆」「事後に原因を求める応」に分けられる。「応」は幸・不幸において事態が起こってから、その原因を探るもので、いわば事後の「兆」への遡及である。したがって「兆」の知識が前提となる。関一敏は人類学で議論されてきた「災因論」は、不幸な出来事の原因を探る「応」にカテゴライズされるものとした〔関 1996：43〕。「兆」の一部として、「知らせるものをこちらから求める占」がある。「手段と方法」は「予防としての不行為である禁」「兆候があったからそれを封じて災いをなくす呪」に分けられる〔柳田 1934、1935、柳田・関 1982、関 1996〕。本調査での質問項目は、この枠組みを基調として、俗信の「方法」においては、柳田が説いた、「知識」と「技術」は緊密に結びついていたが、「知識」の発展に伴い、意味が分からなくなったまま「技術」だけが惰性で残る傾向にある〔柳田 1935〕、という指摘も視野に、「俗信」の分野の違いを意識して作成した次第である。

2 調査概要

本調査は大学生を対象としたアンケート調査である。回答者数は全部で638名であり、俗信に関する地域的な特徴を把握するパイロット調査という位置づけから、北東北、南東北、関東、関西にある大学に協力を依頼している（表1）。国立大学3校、私立大学2校の協力を得ている。これらの大学は、偏差値ランクが中位から上位にある。したがって学力の高い大学生の知識を調査している。また回答者は女性の比率が高い。文系の講義において収集しているが、一部、理系学部の学生も回答している（表2）。学年は2年生がもっとも多く、4年生が最も少ない（表3）。本研究会は弘前大学を拠点としているため、弘前大学の学生の回答がもっとも多くなっており、長く居住した地域が北東北である大学生が多い（表4）。詳細をまとめると以下のとおりとなる。

①調査名称：「大学生の俗信と『知識』に関する調査」

②調査主体：俗信研究会（山田巖子代表）

③調査対象：638名（男性：33.8%、女性：63.9%）

（東京学芸大学・立教大学・東北大学・弘前大学・関西大学の文系授業の受講者）

受講生全員を対象にしたが、既に別の講義で同一のアンケートに答えた学生は除外した。

④実施期間：2020年10月～12月

⑤配布回収方法：オンラインアンケートフォームを用いた集合式調査（一部質問紙配布）

表1 所属大学

東京学芸大学	5.6% (n=36)
立教大学	5.6% (n=36)
東北大学	17.1% (n=109)
弘前大学	44.8% (n=286)
関西大学	26.4% (n=169)
欠損値	0.5% (n=3)

表2 所属学部

人文社会科学部	31.6% (n=202)
文学部	11.9% (n=76)
教育学部	20.5% (n=131)
社会学部	26.4% (n=169)
医学部	6.3% (n=40)
欠損値	3.3% (n=21)

表3 学年

1年生	30.9% (n=197)
2年生	48.4% (n=309)
3年生	16.8% (n=107)
4年生	3.6% (n=23)
DKNA	0.4% (n=2)

表4 最も長く居住した地域

北海道	9.2% (n=57)
北東北	32.3% (n=201)
南東北	8.5% (n=53)
関東	17.7% (n=110)
中部	5.9% (n=37)
関西	22.8% (n=142)
それ以外（西日本）	3.5% (n=22)

3 俗信変数

俗信に関わる変数については、民俗学と日本思想史の知見を検討し選定している。行為と知識を操作的に分類している。まず「兆候があってからそれを封じて災いのなくす呪」と「予防としての不行為である禁」の2つの行為について変数を設定した。

表5 俗信行為

-
- a) けがをした時に砂糖を傷口にぬる
 - b) 蛇やムカデを指したら息を吹きかける
 - c) いやな気持ちがある時に手をたたいて大きな音をだす
 - d) 七夕には七回泳いで七回おやつを食べる
 - e) 盆には墓で食事をする
 - f) こわいものを見る時には指のすきまから見る
 - g) 霊柩車が通る時に親指を隠す
 - h) 朝焼けで天気を予測する
-

表5は「兆候があってからそれを封じて災いをなくす呪」と「未来を推測する知識である兆」と「慣習」に含まれる行為とその頻度を問うものである。ただし「けがをした時に砂糖を傷口にぬる」は、今日では、科学的な検証が行われ、代替医療として認められているものである〔WIRED.jp 2018〕。また「いやな気持ちがある時に手をたたいて大きな音をだす」は「いやな気持ち」の原因を遡及して、霊的なものを想定しているところが「事後の知識である応」と関わる。知識としての「応」と行為としての「呪」の結びつきとして捉えられる。「七夕には七回泳いで七回おやつを食べる」と「盆には墓で食事をする」は地域的な慣習に属する行為、「朝焼けで天気を予測する」は「兆」に分類される行為である。

表6は禁忌とその禁忌意識の程度を問う項目である。「禁」は「予防としての不行為」にかかわる俗信である。人口に膾炙するような一般的なものを選択している。

表6 予防として不行為である禁

-
- a) 新しい靴を夕方におろすこと
 - b) 線香を息で吹き消すこと
 - c) 縁側から家の外に出ること
 - d) 周囲に受験生がいる時に「滑る」「落ちる」という言葉を使うこと
 - e) 北枕で寝ること
-

表7は「俗信」の知識と後付けでなされることの多い「起源譚」の知識を問うものである。これらの変数は現在でも比較的良好に知られた俗信であり、かつ諸説存在するものも含めて何らかの形で由緒や縁起伝承を有するものである。「ナマズが暴れると地震が起こる」という俗信は、江戸後期に発生した安政の大地震（1855年）を契機として爆発的に流行した鯰絵に由来する。龍や鯰など水中世界を司る異類に予知能力を託した民間信仰の一種とされるが、昭和後期の小学校においてもナマズが飼われていたように、かなり認知度の高い俗信の一つといえる。このような民間信仰を基調として流布した俗信としては、平安中期の『宇津保物語』に「厄年」の設定がみえ、中世の古辞

書（『色葉字類抄』『拾芥抄』など）に年齢の諸説が掲載される「厄年には厄払いをする」が挙げられる。また、俗信のうちには由来は定かでないものの、一種の躰として機能するタイプもある。「夜中に爪を切ると親の死に目に会えない」「夜中に口笛を吹くと蛇（泥棒など）が来る」などは爪や息の生霊観とともに暗がりでの爪切りや口笛の禁忌を説く意図もあるが、平安期に栄えた藤原北家の家訓書『九条殿遺誡』や諸貴族の日記（具注暦）に散見されるとおり、手の爪／足の爪を切る日／切ってはいけない日がそれぞれ干支によって決められていた暦の営為に淵源するとみる説もある。

一方、近代化と相俟って浸透した俗信も存する。「写真の真ん中に写ると早死にする」は、幕末明治期における写真文化の移入とともに流布した。もとより科学的な根拠のない俗信だが、当時の映写技術では相当な時間を未知なる機材（カメラ）に対峙していなければならず、かなりの恐怖心を促したであろうことは想像に難くない。複数人で撮影すると中心の人物ほどクリアに写真に写ることから、そのぶん魂が抜き取られたなどといった風聞が伝わったのであろう。また、3人という数を忌避する説、あるいは集合写真の場合には中心に年長者が位置することから必然的に早死にするといった都市伝説風な説が催された。

表7 起源譚の知識を問う俗信

-
- a) ナマズが暴れると地震が起こる
 - b) 厄年には厄払いをする
 - c) 夜中に爪を切ると親の死に目に会えない
 - d) 夜中に口笛を吹くと蛇（泥棒など）が来る
 - e) 写真の真ん中に映ると早死にする
 - f) 丙午（ひのえうま）生まれの女性は夫を不幸にする
 - g) 節分に「鬼は外、福は内」と豆を投げる
 - h) 七夕の笹に願い事を書いた短冊をつるす
-

「丙午（ひのえうま）生まれの女性は夫を不幸にする」という説も一見すると都市伝説風な俗信のようにみえるが、全く位相を異にする。丙午の俗信は江戸時代に起こった出来事が文芸化されて広まり、さらには近代そして現代にまで揺曳した文芸的かつ社会的な知識を伴った俗信である。現代では生まれ年はもっぱら十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）で認識されるが、もとは五行思想に基づく十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）との組み合わせで60通りの循環として年月日などに配当される。うち、丙午の組み合わせはともに「陽の火」に相当し、同じ性質が重複した「比和」となることでその吉凶が増幅するとされ、丙午の年は火事が多いと看做されるようになった。そして、江戸初期に発生した、いわゆる「八百屋お七の放火事件」との連想契機から、八百屋お七が丙午の生まれ（1666年）という設定で文芸創作化（井原西鶴『好色五人女』など）され、浄瑠璃や歌舞伎などの芸能で演じられたことで人口に膾炙するようになり、丙午生まれの女性が俗信化した。

直近の丙午であった1966年は女子出生数は「前年にくらべ 25%の減少、翌年は 42%の増加」であっ

た〔赤林 2007 : pp.18〕。大学生の親世代が1966年前後の生まれと想定できる。したがって、俗信の文化的伝達が家族内でおこなわれるとするならば、大学生の祖父母世代の俗信が影響しているという仮説が導出できる。

一方、現代では年中行事の一環として認識されているもので縁起伝承を有する代表例として、節分・七夕が挙げられる。節分は、中国由来の古代宮廷祭祀の一つであった追儺に淵源し、室町時代には豆まきによる鬼遣らいの風習として広まった（『看聞日記』『花宮三代記』など）。「節分に「鬼は外、福は内」と豆を投げる」との風習でいえば、室町期の臨濟僧の日記『臥雲日軒録』に「唱鬼外服内四字」との明記が確認される。かたや、七夕の起源は定かではないが、その風習は中国の星祭りや乞巧奠と日本古来の棚機津女の信仰が習合した、同じく古代宮廷行事がルーツとされる。「七夕の笹に願い事を書いた短冊をつるす」といった信仰形態で一般に広まったのは時代が降った江戸時代からのことであり、その情景は喜多川守貞『近世風俗志』に詳しく描かれている〔飯島 2011〕。いずれも現代では一般的な年中行事として定着している点で、古代からの歴史的背景を有するものの、現代ではその由緒の知識を伴わない伝統行事と称することができるかもしれない。

4 就職祈願・初詣・墓参り・スピリチュアルな経験

本調査では慣習的行為群を調査している。表8は、慣習的行為のうち、就職祈願という行為の主體的、選択的な側面を問うものである。ここでは大学生が、ご利益のある祈願対象を自由に選んでいるところから、単なる「慣習的行為」とは言えない側面も含まれている。現世利益的、個人的な祈願対象の選択という意味で「お守り」や「呪的行為」と関連する。初詣と墓参りは、俗信を実践する（あるいはしない）者の慣習的行為を問うものである。

表8 個人的選択的事前の行為

-
- | |
|----------------------------|
| a) パワースポットを訪れる |
| b) 風水で調べた吉方に旅行する |
| c) 家相や風水の知識を部屋探しやインテリアに活かす |
| d) 絵馬に願い事を書く |
| e) 歴の良し悪しをみる |
| f) 相性の良し悪しをみる |
-

表9 スピリチュアル（感覚的な）経験

a) 幽霊を見た
b) 虫の知らせがあった
c) 金縛りを体験した
d) 正夢を見た
e) 誰もいないのに気配を感じた
f) 心霊写真を見た
g) 人のオーラを見た
h) その他の科学で説明できないものを見た
i) コックリさん（キュービッドさんなど）をしたことがある
j) いずれも経験なし

さらに表9では、「お守り」「呪物」や宗教的な「知識」と関わる「呪的行為」そしてスピリチュアルな経験の項目を設定している。これらは「個人的選択的な事前の行為」という点で「就職祈願」や「お守り」を持つという行為と関連する項目である。さらに「視覚」「第六感」といった感覚的な経験を主に問うている。その意味でスピリチュアルな経験は「禁」と関連があるという仮説が導出できる。

5 結果

①日常的俗信行為

まず「俗信」にかかる行為について、大学生がどの程度おこなっているか確認しておこう。

もっとも多くの大学生がおこなっている行為は「手段と方法」に分類される「呪」である。「こわいものを見る時には指のすきまから見る」行為は「必ずおこなう」と「ときどきおこなう」をあわせて33.7%の大学生がおこなっており、3人に1人がおこなっている。次に、「霊柩車が通る時に親指を隠す」行為をおこなう大学生は24.0%であり、4人に1人はおこなっている。また事態が起こってからその原因を探る事後の「兆」への遡及である「応」に結びつくと解釈可能なものとして、「いやな気持がする時に手をたたいて大きな音をだす」がある。この行為をするという大学生は9.4%いる。民俗学的な解釈を施すのならば、この場合は、「いやな気持ち」をもたらしたものが外的なものだと判断し、手を叩くという行為で「外的な要因」を祓っていると考えられる。

次に「知識」に分類される「未来を推測する基礎知識である兆」である。「朝焼けで天気を予測する」大学生は17.9%であり、5人に1人はおこなっている。「地域の慣習に関する行為」として「盆に墓で食事をする」大学生は9.6%であった。「けがをした時に砂糖を傷口にぬる」や「蛇やムカデを指したら息を吹きかける」「七夕には七回泳いで七回おやつを食べる」行為をおこなう大学生はほとんどいなかった。

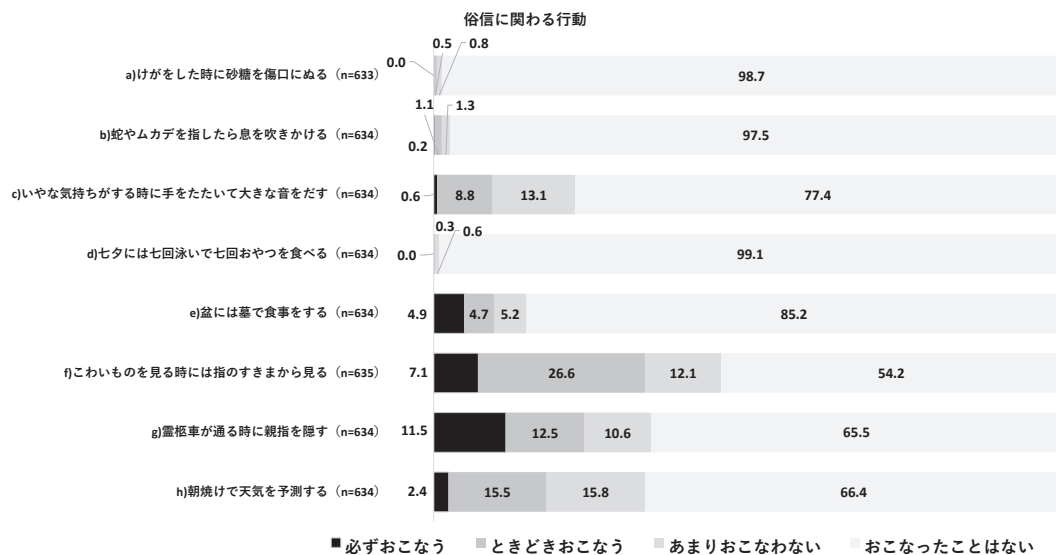


図1 俗信にかかわる行為

②日常的俗信行為の地域性

上述の行為について、地域の特徴を確認していきたい。その際、「けがをした時に砂糖を傷口にぬる」と「蛇やムカデを指したら息を吹きかける」と「七夕には七回泳いで七回おやつを食べる」行為について除外する。またそれ以外の項目についても行為する大学生の総数が少ないため、「必ずおこなう」と「ときどきおこなう」をまとめて「おこなう」、「あまりおこなわない」と「おこなったことはない」をまとめて「おこなわない」とし、二値で分析をおこなう。長く居住したことのある地域とクロス分析をした結果、次の表10のとおり結果となった。

表10 長く居住した地域別にみる俗信行為

	手をたたく n.s.		盆墓食事 ***		指のすきま n.s.		霊柩車 ***		朝焼け天気 ***	
	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n
北海道	7.1	4	14.3	8	21.1	12	12.5	7	33.9	19
北東北	10.9	22	22.9	46	31.8	64	39.3	79	15.4	31
南東北	13.5	7	1.9	1	32.7	17	13.5	7	19.2	10
関東	11.0	12	1.8	2	32.1	35	21.1	23	20.2	22
中部	2.7	1	0.0	0	35.1	13	18.9	7	32.4	12
関西	8.5	12	1.4	2	41.1	58	14.2	20	9.2	13
それ以外	4.5	1	4.5	1	50.0	11	22.7	5	9.1	2
全体	9.5	59	9.7	60	33.9	210	23.9	148	17.6	109

χ^2 検定：***=p<.001, **=p<.005, *=p<.01

「いやな気持ちがする時に手をたたいて大きな音をだす」と「こわいものを見る時には指のすきまから見る」行為とは、地域による有意な差はみられなかった。「盆に墓で食事をする」と「霊柩車が通る時に親指を隠す」行為をすると回答した大学生は、北東北に長く居住している。また「朝焼けで天気を予測する」大学生は北海道に長く居住している。「盆に墓で食事をする」行為は北東北と北海道に特徴的なものであるといえる。この慣習は民俗学では北東北と九州地方に分布することが知られてきた〔関沢 2015〕が、本調査では北海道にも分布が見られた。北東北から北海道への移住や、北海道在住の学生の両親いずれかの実家が北東北であるなどの要因が考えられる。

「呪」に分類される「霊柩車が通る時に親指を隠す」行為も北東北に際立って特徴的であり、地域の慣習である可能性もある。さらに「朝焼けで天気を予測する」行為も北海道で際立っていることに加え、中部より東から北にかけての地域でおこなわれるものである。関西から以西ではあまりおこなわれないうのである。この「俗信」の成立基盤は、自然観察によって得られた経験的な知識と考えられ、生態人類学の分野でエスノ・サイエンスと名付けて対象化している領域と関わるものといえる（注2）。北海道で際立っていることは、天候によって生活が作用される度合いが高いからとも考えられる。

③日常的俗信行為と三世代家族

表11は祖父母との同居経験別に俗信にかかわる行為をおこなったかどうか分析したものである。その結果、祖父との同居経験の有無と関連する行為は「いやな気持ちがする時に手をたたいて大きな音をだす」と「霊柩車が通る時に親指を隠す」であり、祖母との同居経験の有無と関連する行為は「盆に墓で食事をする」と「霊柩車が通る時に親指を隠す」であった。同居経験がある大学生のほうがない大学生よりも行為する率が高いように考えていたが、「霊柩車が通る時に親指を隠す」大学生の祖父との同居経験率は低く、祖母との同居経験率は高いという相反する結果であった。「盆に墓で食事をする」が祖母との同居率が関わるのは、祖母と墓参する習慣があるからではないか。また、「霊柩車が通るときに親指を隠す」という俗信も祖母から学んだ可能性がある。一方、「いやな気持ちがするときに手をたたいて大きな音を出す」は祖父との同居経験と関連することから、祖父の行為から学んでいる可能性がある。

表11 祖父母との同居経験別俗信かかわる行為

%	手をたたく	盆墓食事	指のすきま	霊柩車	朝焼け天気	n
祖父と同居経験あり	13.0	8.7	34.0	21.5	18.4	208
祖父と同居経験なし	7.5	11.1	33.0	28.8	15.9	424
祖母と同居経験あり	11.3	12.8	32.3	28.3	18.1	265
祖母と同居経験なし	7.9	7.1	34.6	20.7	17.2	367

χ^2 検定：* $p < .05$

④ 日常的行為としての禁忌

次に「禁」に関わる行為を確認していこう（図2）。「受験生がいる時に『滑る』『落ちる』という言葉を使うこと」を避ける大学生は86.2%と最も多かった。「線香を息で吹き消すこと」を避ける大学生が70.0%で次いで多く、「北枕で寝ること」を避ける大学生が52.4%であった。それと比較して「縁側から外に出ること」を避ける大学生は5.5%と1割未満であり、「新しい靴を夕方におろすこと」を避ける大学生も14.4%と少ない。

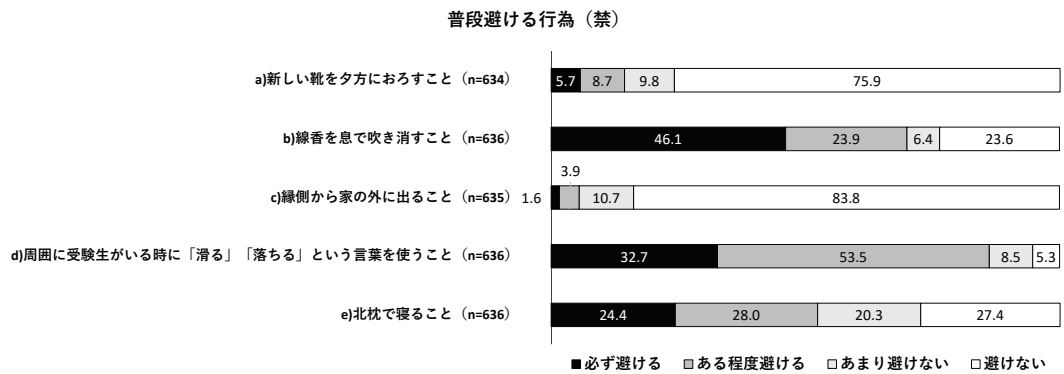


図2 禁忌

⑤ 禁忌と地域性

禁忌について地域の特徴を確認していこう（表12）。関西に長く居住経験のある大学生は「新しい靴を夕方におろすこと」を避ける率が高い。「線香を息で吹き消すこと」を避ける大学生は北東北で多くなっている。「縁側から外に出ること」「受験生がいる時に『滑る』『落ちる』という言葉を使うこと」「北枕で寝ること」を避ける大学生は地域性とは関連がなかった。

表12 禁忌と地域

	新しい靴 ***		線香に息 ***		縁側外 n.s.		受験生 n.s.		北枕 n.s.	
	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n
北海道	1.8	1	77.2	44	5.4	3	91.2	52	47.4	27
北東北	4.0	8	83.9	167	7.0	14	86.4	172	61.3	122
南東北	20.8	11	60.4	32	9.4	5	90.6	48	54.7	29
関東	16.5	18	70.9	78	2.7	3	84.5	93	50.0	55
中部	18.9	7	78.4	29	10.8	4	89.2	33	56.8	21
関西	26.8	38	53.5	76	1.4	2	85.2	121	45.1	64
それ以外	13.6	3	59.1	13	9.1	2	77.3	17	36.4	8
全体	13.9	86	70.8	439	5.3	33	86.5	536	52.6	326

χ^2 検定：***=p<.001, **=p<.005, *=p<.01

「受験生がいる時に『滑る』『落ちる』という言葉を使うこと」の禁忌に地域差がないのは、大学受験の際に、自身が当事者として見聞きした可能性が高く、全国的に広がっている「知識」と考えられる。「必ず避ける」割合も32.7%と高い。また、「北枕」の禁忌は、釈迦入滅の際の故事からきていると言われているものの、日本にのみ伝わる禁忌である。52.4%と禁忌意識を持つ割合は高いが、「必ず避ける」割合は24.4%と、「線香を息で吹き消すこと」や「受験生がいるときに『滑る』『落ちる』という言葉を使うこと」という禁忌よりも低い。禁忌意識は必ずしも高くはないといえる。

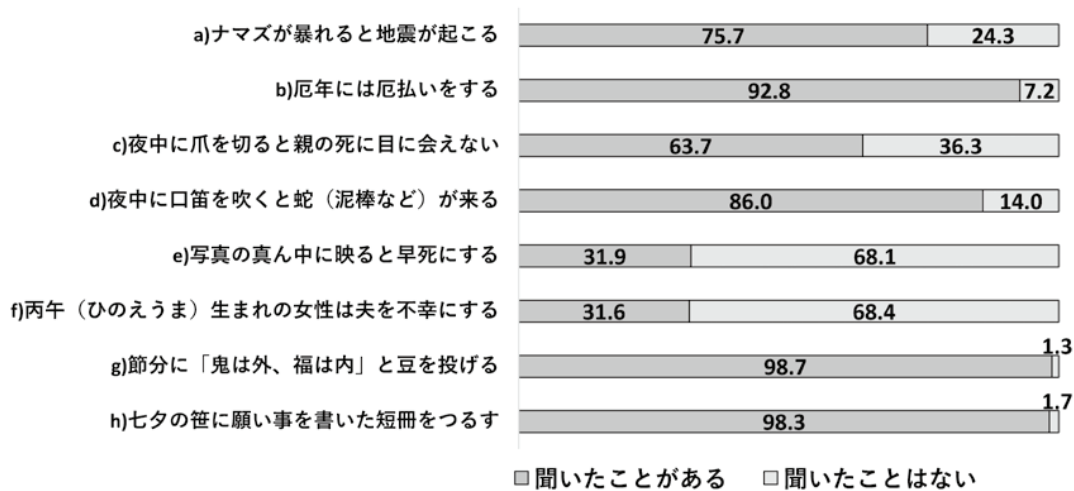
「新しい靴を夕方におろすこと」は葬送の習俗から来ており、死者に新しい草履を履かせて出棺することから、日常で行うことを禁じたものである。関西圏に禁忌意識が高いことはこのような習俗の記憶が、大学生の親や祖父母の世代には断片的にせよ残っていることが推測される。一方、「線香を息で吹き消すこと」の禁忌は、盆や法事などの機会に近親者から学んだ可能性が考えられ、家族と墓参したり、仏壇に手を合わせたりする機会が多いと残りやすいといえる。北東北に割合が高いが、すべての地域で50%を超える高い割合で守られている。「必ず避ける」割合も46.1%と高く、死者と関わる禁忌と意識されている可能性がある。

⑥禁忌と三世代家族

調査設計の段階では、大学生の祖父母同居と「禁」には関連があると推測していたが、調査結果からは、統計的な関連が見いだせなかった。「禁」という「不行為」を大学生達は、「古老」から受け継いでいるわけではない。

⑦俗信の起源譚

次に起源譚の知識について確認していきたい(図3)。大学生の半数以上は「丙午生まれの女性は夫を不幸にする」と「写真の真ん中に映ると早死にする」という俗信以外について「聞いたことがある」と回答している。さらにそれらの由緒を知っているかどうかについても尋ねている(図4)。また「聞いたことがある」と回答した大学生のうち31.6%が「丙午生まれの女性は夫を不幸にする」の由緒を知っており、最も多かった。



俗信に関わる知識 (n=637)

図3 起源譚にかかわる俗信

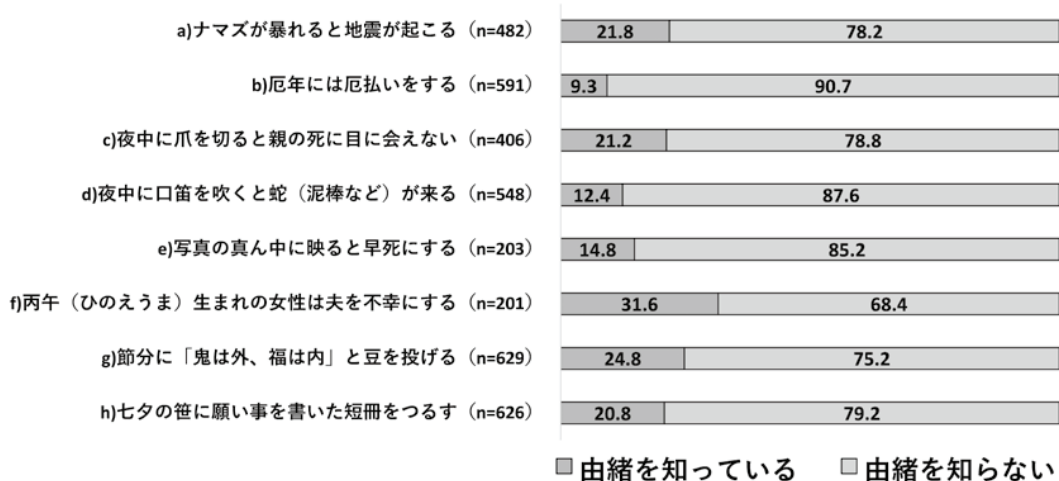


図4 起源譚にかかわる俗信の由緒を知っているか

由緒がある俗信を半数以上の大学生が見聞きしているいっぽうで、由緒に関する知識とはリンクしていない。俗信には由緒の知識は必ずしも必要ではないが、そのなかにあつて丙午に関する由緒の知識の保持は、31.6%と高い数字を示している。現在の大学生の親世代が1966年前後の生まれであり、近親者からこの「知識」を受けたことが推測される。現実に影響を及ぼす選択と関わる「知識」であり、「由緒」がその行為の根拠として引用された可能性がある。

⑧俗信知識の地域性

表13は地域別にみた俗信知識をもつ大学生の率となっている。地域性がみられる俗信知識は「ナマズが暴れると地震が起こる（ナマズ）」「写真の真ん中に映ると早死する（写真）」「丙午生まれの女性は夫を不幸にする（丙午女性）」の3つであった。「ナマズ」については北海道と関東で、「写真」は北海道で、「丙午女性」は北海道と関東で知られているようである。これらの由緒についての知識の有無と地域には関連はなかった。

北海道は、この知識を持つ大学生が87.7%を占め、高い割合を示している。17世紀以降、十勝沖地震が複数回起こっていることや、2000年代以降も北海道の地震が2021年9月までで20回を数える（「防災情報ナビ」）など、大学生の記憶や経験が、この「知識」の定着に影響している可能性がある。次に多いのが関東地方の83.6%で、前述したように、「地震とナマズ」の結びつきは、1855年に起きた安政の大地震の後、江戸を中心に大量に出版された錦絵の図柄として広まった。江戸の流行であったことから、ナマズと地震の結びつきは関東地方在住のものの知識に影響を与えている可能性がある。また、1923年（大正12年）に発生した 関東大地震 によって 南関東 および隣接地で大きな被害があったため、ナマズと地震を結びつける江戸時代の知識が残ったとも考えられる。この「知識」は、関西圏以外は、70%を超えて知っていると回答しており、認知度が高いことが分かる。

「丙午生まれの女性は夫を不幸にする」も関東地方が40.9%と高い割合で知られている。前述したように、江戸本郷の放火事件で処刑された娘が丙午生まれと喧伝されたことから、芝居や映画などの知識も相まって関東地方で記憶に残りやすかったと解釈することも可能である。

表13 起源譚に関わる俗信知識と地域

%	ナマズ	厄払い	夜中爪切	夜中口笛	写真真ん中	丙午女性	節分	七夕	n
	***	n.s.	n.s.	n.s.	**	*	n.s.	n.s.	
北海道	87.7	92.9	56.1	87.7	50.9	38.6	100.0	100.0	57
北東北	79.1	95.5	68.7	84.1	38.5	33.3	100.0	100.0	201
南東北	73.1	88.5	71.2	90.4	26.9	38.5	98.1	100.0	52
関東	83.6	93.6	56.4	86.4	28.2	40.9	99.1	99.1	110
中部	78.4	94.6	70.3	86.5	16.2	35.1	97.3	100.0	37
関西	62.0	90.8	62.0	90.1	28.2	21.1	99.3	95.8	142
それ以外	77.3	95.5	63.6	81.8	18.2	13.6	100.0	100.0	22
全体	75.7	92.8	63.7	86.0	31.9	31.6	98.7	98.3	621

χ^2 検定：***=p<.001, **=p<.005, *=p<.01

⑨起源譚に関わる俗信知識と三世代家族

このような俗信知識の継承について家族の影響を確認していこう。表14に示したとおり、祖父母と同居したからといって俗信知識があるとはいえない。いっぽうで、由緒の知識の有無は祖父母との同居経験と関わっている（表15）。丙午女性の知識については、祖父母と同居した経験がある大学生は同居経験のない大学生よりも由緒を知っていると回答する率が高い。また節分の由緒を知っている大学生は祖母との同居経験がある。

表14 起源譚に関わる俗信知識と祖父母との同居経験

	ナマズ		厄払い		夜中爪切		夜中口笛		写真真ん中		丙午女性		節分		七夕	
	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n
祖父と同居経験あり	78.6	165	92.8	194	64.8	136	82.9	174	35.2	74	31.9	67	97.5	205	98.1	206
祖父と同居経験なし	74.4	316	92.9	395	63.3	269	87.8	373	30.4	129	31.5	134	99.5	423*	98.6	419
祖母と同居経験あり	78.3	209	91.7	244	64.8	173	84.3	225	32.6	87	33.7	90	97.8	261	98.5	263
祖母と同居経験なし	73.9	272	93.8	345	63.0	232	87.5	322	31.6	116	30.2	111	99.7	367	98.4	362

χ^2 検定：***=p<.001, **=p<.005, *=p<.01*

直近の丙午である1966年とその前後は、大学生の親の世代であり、祖父母はさらにその親世代である。祖父母が若い頃に子どもを産む際の判断に丙午の知識が参照された可能性が考えられ、祖父母同居の大学生が祖父母や親類を通してこの知識を得たことが推測できよう。

節分の豆まきは年中行事であるが、家の行事として行う家も多い。祖母が豆煎りなどの節分の準備をに担っていた可能性があり、祖母同居の大学生が節分の由緒を知るのは、このことと関わりと推測される。

表 15 起源譚に関わる俗信の由緒知識と祖父母との同居経験

	ナマズ		厄払い		夜中爪切		夜中口笛		写真真ん中		丙午女性		節分		七夕	
	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n
祖父と同居経験あり	24.2	40	13.3	26	26.5	36	14.9	26	16.2	12	55.2	37	30.7	63	22.8	47
祖父と同居経験なし	20.6	65	7.3	29	18.6	50	11.3	42	14.0	18	26.1	35 ^{***}	21.7	92	19.6	82
祖母と同居経験あり	22.5	47	12.2	30	23.7	41	13.8	31	17.2	15	47.8	43	30.3	79	23.6	62
祖母と同居経験なし	21.3	58	7.2	25	19.4	45	11.5	37	12.9	15	26.1	29 ^{**}	20.7	76 ^{**}	18.5	67

χ^2 検定：***=p<.001, **=p<.005, *=p<.01***

⑩慣習的信仰

次に慣習的信仰について確認しておこう。大学生にとって就職活動は人生にとって最も重要な活動の一つとなっている。その祈願をおこなっているかどうか尋ねている（表16）。その結果、91.9%の大学生が祈願をおこなうようである。そしてもっとも多くの大学生が「全国的に有名な神社」に参ると回答している（43.5%）。就職活動は主として3年生から4年生にかけておこなうものであり、学年によって祈願をおこなうかどうかには差があると考えていたが、有意な差はみられなかった。

表 16 地域別にみた就職祈願にいくところ

%	生まれた場所	現住所の近く	全国的に有名	生年の守り神	祖先のお墓	決めていない	就職祈願はしない	n
	***	n.s.	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	
北海道	49.1	38.6	31.6	3.5	14.0	22.8	7.0	57
北東北	47.3	41.8	38.8	11.9	23.4	20.9	10.9	201
南東北	46.2	57.7	34.6	7.7	15.4	17.3	11.5	52
関東	28.2	44.5	50.9	3.6	16.4	20.0	10.0	110
中部	40.5	43.2	40.5	0.0	18.9	16.2	5.4	37
関西	20.4	33.1	52.8	2.8	12.0	30.3	2.8	142
それ以外	40.9	27.3	45.5	4.5	9.1	27.3	4.5	22
合計	37.2	40.9	43.5	6.3	17.2	22.7	8.1	621

χ^2 検定：***=p<.001, **=p<.005, *=p<.01

就職祈願は特別なご利益を願う選択的な行為であると考えられる。その際に、「全国的に有名な神社」への参拝が43.5%と高いが、特別な機能を期待する場合に遠隔地の神を参拝する〔宮田1993〕という代参講のなどの研究も重ねて考えるべきか。割合は少ないが、「自分の生まれ年の守り神にあたる神社」に参拝する大学生は6.3%である。設問の際に、青森県に特有の民俗信仰「イチダイ様」（自分の生まれ年の守り神に対する信仰）との関連を予想した。この信仰は、江戸時代に「大雑書」と呼ばれる暦の本によって広く知られたが、津軽地方では、寺社参拝の儀礼と結びついて民俗信仰化した。青森県の旧盛岡藩領ではイタコの祈祷などと結びつき、また、仙台地方や南島にもこの「知識」が民俗信仰として広まっていることが明らかにされてきた〔小池 2011〕。津軽

地方では、初詣に氏神ではなく、イチダイサマの寺社に参拝する人々も一定数以上は存在するため、ことさら特殊な選択とはいえない。

しかし、地域分布を見てみると、中部地方以外は、少ないながらも、「生まれ年の守り神」に参拝していることが確認でき、従来把握されていた範囲よりも広い範囲で、この信仰的知識が広がっている可能性がある。

⑪慣習的信仰と個人的主体的な祈願行為

慣習的信仰をおこなう大学生は、普段から墓参りをおこなう（表17）。さらに祖先の墓に就職祈願をするという行為についても墓参の習慣のある大学生がおこなっている。また神や仏を信じている大学生が慣習的信仰をおこなっていることが明らかとなった（図5）。墓参などの慣習的行為をおこなう大学生が、「就職」という自身の進路上の大事な機会に選択的な行為として祈願という行為を選んでいるといえる。

就職祈願は、一般的には神社を選択すると推測されるが、「自分の祖先のお墓」に祈願する大学生が17.3%存在する。これらの人々は、「祖先」を祈願対象にしていることが分かる。墓参の慣習がある大学生の19.1%が「祖先の墓」に祈願しており、墓参の慣習のない大学生の3.1%よりも高い。わざわざ就職祈願に墓参するというより、墓参の機会に自身の個人的な祈願をしている可能性もある。

大学生全体として就職祈願をおこなう率が高いようであるが、「神や仏などの超越的な存在を信じていない」大学生は就職祈願をする率が低い（82.7%）。また「神や仏などの超越的な存在を信じている」かどうかについて「あてはまる」と回答した大学生94.0%が就職祈願に行くのは、言葉と行動の一致といえる。一方で、「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」と回答した学生の90%以上が就職祈願に行くのは、信心とは別の何らかの意義や価値を参拝に見いだしていると考えられる。これは、前述した、「(A)と分かっている、でもやはり(B)」という、呪術の言葉と行為の飛躍〔関 2006〕とともに考えるべき問題をはらんでいる。民俗学では、祭りや儀礼の際の人々の行為を観察、記録することで、民衆の「神観念」を抽出してきた。観察調査を行う際には「就職祈願に行く」という行為にのみ焦点が当てられ、行為をする人々の「内面」は問題にされてこなかった。本設問は、「就職祈願」という個人的、主体的な行為でも、「信心」とは別の何らかの要因が行為に向かわせていることが分かる。

表17 墓参りの有無と就職祈願

	就職祈願をする	祖先のお墓に就職祈願
墓参りに行く	92.3% (n=60)	19.1% (n=107)
普段から墓参りには行かない	87.7% (n=492)	3.1% (n=2)

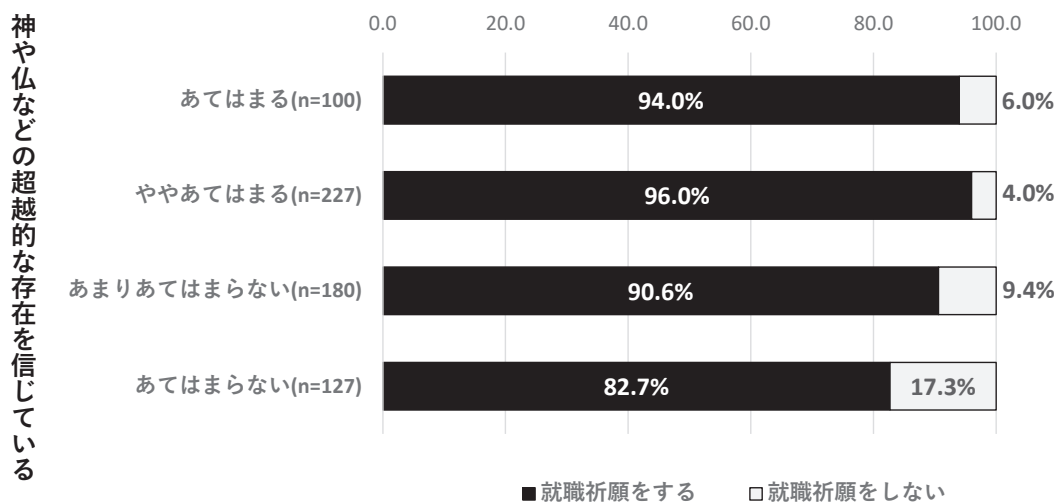
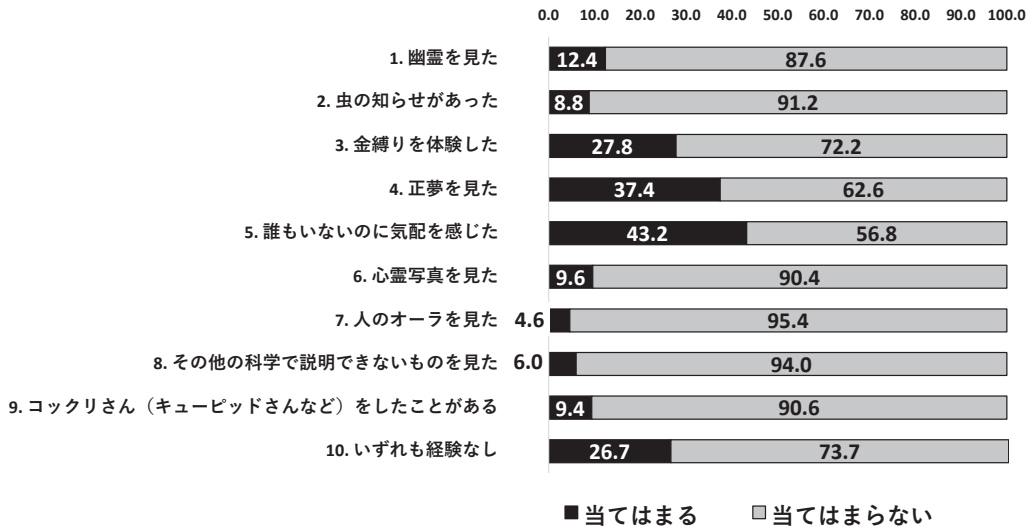


図5 神や仏への信仰と就職祈願

⑫非科学的体験

一般的に「非科学的」とされる経験は、「超越的な力」の存在を背景とする知識体系と相関関係があることが想定されるため、「俗信」との関わりで注目したのが、「感覚」である。「コックリさん（キューピッドさんなど）をしたことがあるか」は、子ども時代の心霊遊びの経験を問うているが、これらの遊びは「無意識に指が動く」などと言われ、意識と無意識のあわいにある感覚を経験するものでもある。

「非科学的」とされる体験の有無については、図6に示している。「誰もいないのに気配を感じた」経験のある大学生は43.2%と最も多い。次いで「正夢を見た」大学生は37.4%、「金縛りを体験した」大学生は27.8%であった。このような体験をしたことがない大学生は26.7%であった。4人中3人程度の大学生が何らかの「非科学的」とされる体験をしていることがわかる。「金縛り」は、睡眠障害の一種と解説するものもあるが、霊的なものと関わる語彙があることによって特定の身体感覚／身体状況が把握され、経験の共有が可能であることが重要であるといえる。



非科学的体験 (n=636)

図6 非科学的体験

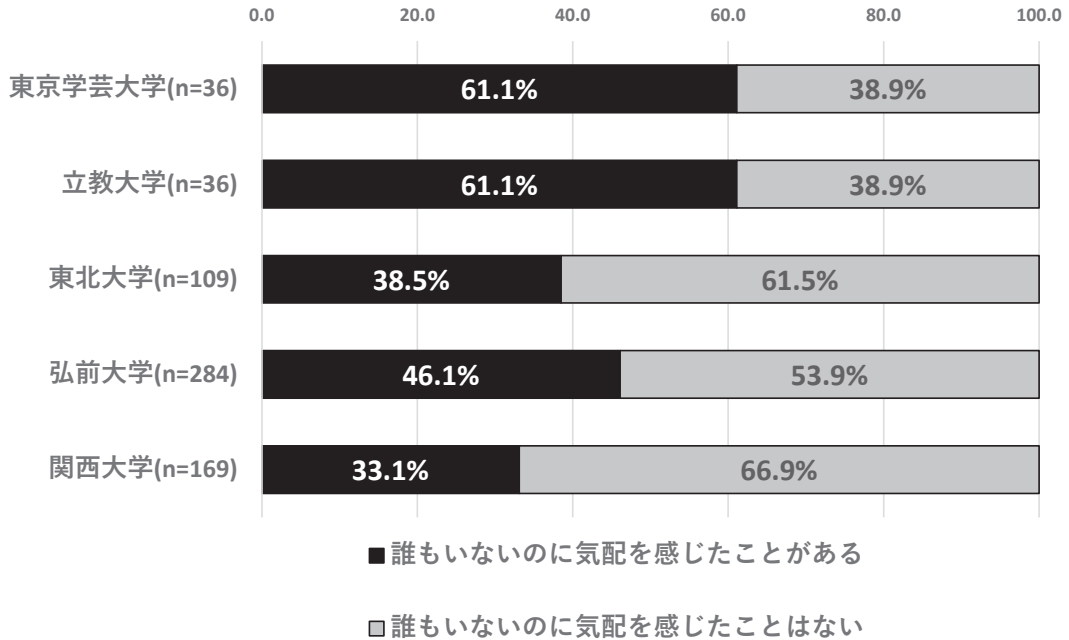


図7 所属大学別「誰もいないのに気配を感じた」体験

「非科学的」とされる体験と長く居住した地域との関連はみられなかった。ただし「誰もいないのに気配を感じた」という経験については所属大学との関連があり、大学という学校文化の中で醸成されている可能性も考えられる（図7）。

「非科学的」とされる体験と「俗信」に関わる行為や不行為（禁）について連関はみられなかった。また墓参やお守りの保持、宗教への関心の有無、神や仏を信じているかどうかなどは関連がみられなかった。ただし、「靈魂を信じている」大学生や「非科学的な超越的な力を信じている」大学生はこのような「非科学的」とされる体験をした率が高い（図8）。

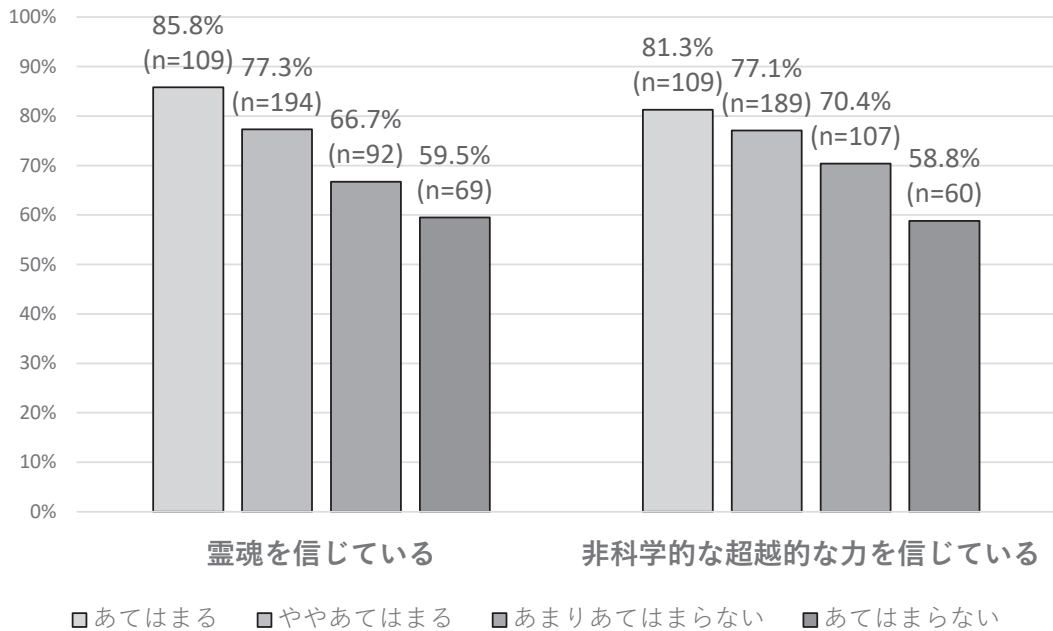


図8 非科学的とされる体験の有無

起源譚にかかわる俗信と慣習的俗信の主体性・選択性を測定する就職祈願とは関連がみられなかった。一方で、表18にあるように禁忌との正の相関がみられた (χ^2 検定: $p < .05$)。ただし「ナマズが暴れると地震が起こる」と「写真の真ん中に映ると早死にする」と「丙午生まれの女性は夫を不幸にする」という俗信はどの禁忌意識とも相関はなかった。

「パワースポット」「風水旅行」「風水インテリア」「絵馬」「暦の良し悪し」「相性の良し悪し」などの行為をしたことがない大学生は、「厄年」と「写真の真ん中」という俗信を聞いたことがないと答える率が高い（表19）。

表 18 起源譚に関わる俗信と禁忌意識との相関分析の結果

	新しい靴	線香息	縁側外	受験生	北枕
①ナマズ					
②厄年		.193**		.110**	
③夜中爪切		.201**			
④夜中口笛					.099*
⑤写真の真ん中					
⑥丙午の女性					
⑦節分			-.098*	.128**	
⑧七夕		.121**		.085*	

表 19 起源譚に関わる俗信と呪的行為の相関分析の結果

	パワースポット	風水旅行	風水インテリア	絵馬	暦良し悪し	相性の良し悪し
①ナマズ	.095*					
②厄年	.078*			.083*	.139**	.152**
③夜中爪切			.093*			.109**
④夜中口笛						.085*
⑤写真の真ん中					.091*	.158**
⑥丙午の女性						
⑦節分						
⑧七夕						

「パワースポット」「風水旅行」「絵馬」「暦の良し悪し」「相性の良し悪し」などの呪的行為をしたことがない大学生は、吉凶という感覚に親和性がないと推測され、そのような感覚を得る機会、例えば親の人生儀礼である「厄年」などの俗信を、年長の者から聞く機会などが少なかったと推測される。「厄年」は、その年の行動を慎んだり、厄払いをしたりすることと結びつき、「禁」と親和性が高い。ここでは「線香に息を吹きかけない」という先祖供養と結びつく「禁」や、「受験生の前で『滑る』『落ちる』と言わない」という「禁」と相関関係が見られる。「厄年」も、「受験」や「先祖供養」と同じように人生の節目を示すライフイベントの一つであることから、ライフイベントの感覚が薄い大学生が、その際に入手する種類の知識に疎いことが推測される。

また、「夜中の爪切り」は禁忌侵犯の報いとして「親の死に目に遭えない」などと言われることが多く、先祖供養の際の「禁」である「線香に息」と相関関係がある。

年中行事の知識である「節分」は、葬式の儀礼から出た禁忌「縁側から外に出ない」と、受験期の忌み言葉と相関関係があった。また年中行事である「七夕」の知識は、先祖供養の文脈の「線香に息をふきかけない」、受験期の忌み言葉と相関関係があった。これらの禁忌は躰の文脈で、発せられるもので、年中行事を大事にする家で伝えられやすかったと推測される。

初詣に行くかどうかについては、起源譚にかかわる俗信との関連はみられなかった。その一方で、墓参りに行くかどうかとはいくつかの項目で関連がみられた（表20）。「夜中の爪切り」「夜中の口笛」「節分」「七夕」を聞いたことがないと回答している大学生は墓参りに行かない率が高い。「節分」「七夕」とともに墓参りは盆の年中行事に組み込まれている。「節分」「七夕」の知識と墓参をしないう大学生との相関関係は、家庭で年中行事が希薄な大学生が、年中行事の知識を欠く、と言えそうである。また、「夜中の爪切り」「夜中の口笛」は、前述したように子どもへの躾としても機能している「禁」でもあり、墓参の習慣のない大学生は盆行事などの際に、親類縁者などから躾と関わる知識を得にくい、あるいは得たとしても価値を置きにくい傾向にあると推測される。

表20 墓参りと起源譚にかかわる俗信

	夜中に爪†		夜中に口笛†		節分*		七夕***		n
	ある	ない	ある	ない	ある	ない	ある	ない	
墓参りをする	65.7	46.9	79.6	20.4	95.9	4.1	93.9	6.1	539
墓参りをしない	53.1	34.3	87.2	12.8	99.3	0.7	99.1	0.9	98

χ^2 検定：***=p<.001, **=p<.005, *=p<.01, † =p<.05

6 おわりに

今回の調査で明らかになったことは次の通りである。

第一に、大学生の「俗信」の保持率の高さである。「行為」（呪）と関わる俗信では、「こわいものを見る時には指のすきまから見る」、「霊柩車を通る時に親指を隠す」の行為率が高かった。一方、「不行為」（禁）では、「受験生がいる時に『滑る』『落ちる』という言葉を使うこと」「線香を息で吹き消すこと」「北枕で寝ること」であり、「行為」と比べると「不行為」が高い割合で保持されている。また、「禁」では前者の二つは、後者「北枕」よりも禁忌意識が高かった。さらに「兆」においては「朝焼けで天気を予測する」は5人に1人が知る「知識」であった。俗信の知識と由緒に関する知識とはリンクしていなかったが、丙午に関する由緒の知識は、3割以上と高い数字を示した。不合理ゆえに「由緒」を必要としたことが推測される。

第二に、「俗信」の地域性では、俗信の種類によって知る程度には地域差があることが明らかとなった。北海道に長く居住する学生が知る割合が高い「俗信」は、「朝焼けで天気を予測する」、「ナマズが暴れると地震が起こる」、「写真の真ん中に映ると早死する」であった。北東北に長く居住する学生は「霊柩車を通る時に親指を隠す」「線香を息で吹き消すことを避ける」、関西地方では「新しい靴を夕方におろすことを避ける」率が高い。関東地方では、「丙午生まれ」の俗信を知る率が高かった。北海道では、天気や地震などの自然と関わる俗信を知る割合が高く、東北では、死や祖霊に関わる俗信が知られる割合が高かった。「丙午」は江戸発祥の事件が人口に膾炙したことが関東地方で割合が高くなることと関わるであろう。

第三に、三世同居と「俗信」の知識の相関関係については、俗信の種類により違いが見られた。

祖母との同居経験がある場合に、「霊柩車が通る時に親指を隠す」、節分の由緒を知っている割合が高くなった。また、「丙午」の知識については、祖父母と同居した経験がある大学生が由緒を知っていると回答する率が高い。一方「禁」には関連がなく、「古老」から「俗信」知識を受け継いでいるわけではないことがわかる。

第四に、慣習的行為と「俗信」の関係である。9割以上の大学生が就職祈願をおこない、4割以上が、「全国的に有名な神社」に参ると回答している。また、墓参の慣習がある大学生は、慣習のない大学生よりも「祖先の墓」に祈願する割合が高い。神仏を信じているかどうか曖昧な回答をした学生の9割が就職祈願に行く。このことは、祈願成就とは別に、参拝という行為自体に何らかの意義や価値を見いだしていると考えられる。また、就職祈願と禁忌には正の相関がみられ、「よくない」とされる行為をしないことで災いを避ける意識と就職祈願に関連性がある可能性がある。個人的、主体的な行為においても、個人の「信心」とは別の要因があることが確認できた。

第五に、体験を一般的に「非科学的」なものとしてされる事象と結びつけて解釈することの割合と「俗信」の間に関係がなかったことである。4人中3人程度の大学生が何らかの「非科学的」とされる体験をしていることがわかったが、これらの体験と俗信に関わる行為や禁忌について連関はみられなかった。ただし、「靈魂を信じている」大学生や「超越的力を信じている」大学生は「非科学的」とされる体験をした率が高い。

第六に、いわゆるスピリチュアルな行為と「俗信」の関係について次のことがわかった。厄年など、「吉凶」という意識と関わる「俗信」の知識がない大学生は、スピリチュアルな行為を行わないことが明らかとなった。

今回の調査では、「俗信」を信じているかと問われれば必ずしもそうではないが、日常的な行為の傾向性として、行為や不行為に関わる「俗信」を保持しているようである。就職祈願などの主体的、個人的に見える行為も、その動機は必ずしも信心ではない、ということも同時に明らかとなった。また、「墓参り」などの慣習的な行為が、特定の「俗信」と相関関係があることから、家庭内での「行為」の有無が「俗信」を知る機会や親和性と関係があるといえそうである。俗信に関わる伝達を「古老」が若い世代におこなっているわけではなく、それぞれの地域における文化のなかでどのような家で育ってきたのかという家の慣習とでもいべき行為と関わっているのではないだろうか。

若い世代においても自身の行為／不行為に、エビデンスはないが見知ったことを指針にするということが分かり、このような傾向性こそが、「俗信」が維持され続ける要因であったと考えられる。

注

(1) 同時代人が常に「科学的」「合理的」な基準にあわせて生活しているわけではない。「科学的」とされる言説を検証し、生活の中では「科学的に証明されている」という語り方は話の信憑性を表現するレトリックに過ぎない、とする〔重信 1989〕や、「健康」に関する「知識」の日常の中での流通を検証した〔野村 2000〕は、広い意味で同時代の俗信研究といえる。

(2) 生態人類学の分野では、科学／非科学の二項対立を排して、自然と密接に接触している人々の経験の束そのものを、エスノ・サイエンスとして対象化する議論が蓄積されている〔寺島 2022〕。

参考文献

- 赤林英夫「丙午世代のその後—統計から分かること」労働政策研究・研修機構編『日本労働研究雑誌』596 2007
- 飯島吉晴「節分と節供の民俗」『天理大学考古学・民俗学研究室紀要』15 2011
- 石川栄吉他編『文化人類学事典』1987 弘文堂
- 板橋作美『俗信の論理』1998 東京堂
- 宇都宮京子「終章—生活意識と呪術的なるもの」〔竹内・宇都宮編 2010〕
- 小野泰博編『呪術の世界』（現代のエスプリ）132 1978 至文堂
- 小池淳一『陰陽道の歴史民俗学的研究』2011 角川書店
- 小島博巳「『俗信』覚書—概念の再検討に向けて—」『民俗学評論』23 1983 大塚民俗学会
- 重信幸彦「食卓の幻影—「汚穢」と「死」の気配」『言語』18巻12号 1989 大修館書店
- 関一敏「俗信論序説」筑波大学歴史人類学系民族学研究室『族』27 1996
- 関一敏「呪術とは何か—実践論的転回のための覚書—」川田牧人編『東南アジア・オセアニア地域における呪術的实践と概念枠組に関する文化人類学的研究』2004 中京大学社会学部
- 関一敏「呪術とは何か—実践的転回のための覚書」白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』2012 人文書院
- 関沢まゆみ「民俗研究映像「盆行事とその地域差」」関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館編『盆行事と葬送墓制』2015 吉川弘文館
- 竹内郁郎・宇都宮京子編『呪術意識と現代社会—東京都二十三区民調査の社会学的研究—』2010 青弓社
- 寺嶋秀明「フィールドの科学としてのエスノ・サイエンス」寺嶋秀明・篠原徹編『エスノ・サイエンス』2002 京都大学出版会
- 野村典彦「健康に生きる—「知識」の流通と身体の自覚」『世間話研究』10号 2000 世間話研究会
- 「防災情報ナビ」https://www.ibousai.jp/disaster/quake_jp_hokkaido.html 20221123検索
- 宮田登『山と里の信仰史』1993 吉川弘文館
- 柳田国男『民間伝承論』1934 第三書館
- 柳田国男『郷土生活の研究法』1935 刀江書院
- 柳田国男・関敬吾『日本民俗学入門』1942 新版 1982 名著出版
- WIRED.jp「砂糖は抗生物質に代わる「未来の抗菌薬」になるかもしれない」<https://wired.jp/2018/04/28/zucchero-disinfettante-futuro/> 20221123検索

2022年12月2日受付、2023年2月9日採択決定

謝辞

本研究は以下の方々にご協力いただきました。木村敏明先生、苫米地伸先生、平澤卓也先生、松下慶太先生、山口恵子先生、今田匡彦先生。記してお礼を申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 JP20H01400 「『知識』の再配置と実践—東北の巫者と寺院をめぐる—」（研究代表 山田巖子）の助成を受けたものです。